

ぷれみあむ  
みにっつ

第9集

雨の訪問者  
の巻

☆ shiroa ☆

俺は焦りを感じながら、ミユウちゃんの携帯へ電話をかけた。

プップップ、と音がなり、回線を一生懸命つなごうとする。プ、と少し違う音が鳴り、つながったかと思ったら、『おかけになった電話番号は、電源が入っていないため、かかりません』とメッセージが流れた。

俺の胸に不安がよぎる。が、俺もあまりのんびりもしてられない。早くこの場から立ち去らねば、雲運運団は今にも宝くじが奪われたのに気づき、捜索を開始するかもしれない。そしたら俺はすぐに捕まってしまうだろう。

ミユウちゃんがどこに消えたのかは判らないが、とりあえずこの場を去りアパートに帰ろう。

俺は双眼鏡を拾い、雲運運団の事務所を覗いた。中では特に慌ただしい動きは見えない。まだ、バレてはいないようだ。

……すぐにばれてもおかしくないような場所にあるんだけど。

案外すぐに確認できるような場所にある、という安心感と、神棚というちょっと目線の高いところに置いてあるため、気づかないのかもしれない。でも、昨日カエルたちにパクられたところだぜ?! 休憩して誰も事務所になくなって。そしたら普通確認するよな。っていうか、普通はあんな誰でも手に触れられそうな場所には置かないか。

俺はどうやら普通じゃないことに運命を助けられたようだ。俺は急いで廃ビルの一階に移動し、周りに人がいないことを確認して外へ出た。

よし、誰もいない。

大通りに出るまでは早歩きで行こう。もし走っているのを見られれば、逃亡しているように見られなかねない。

と、そこでポーっとしたヤツが大通りからこちらに向かい歩いてきた。覇気のない初老の男だ。別に妙竹林な格好をしているわけではない、ただの通行者か。問題はないだろう。それよりもはやく大通りに出なければ。大通りへ出れば、人がいる。人に紛れれば、もし追ってきてもすぐに俺のことはわかるまい。雲運運団で俺のことがわかるのは、パンダマンと弁慶の二人だけだ。

ボケーっとした男とすれ違い、もう少しで大通りにでられそうだといいところで、にわかには背後から怒号が聞こえた。

「急げ! 急げ!」

さ・す・が・に、そろそろ気づいたのね!

俺が足早に通りに出ようとした時、ボケーっとした男は大声でこう言った。

「ごめーん! また遅刻しちった!」

げ、こいつ雲運運団のメンバーか?! 俺は焦ったが、とりあえず宝くじの件はバレていない様子だ。ラッキー! 俺はすぐに大通りに出ると、アパート目指して駆け出した。

空が暗くなってきた。太陽が沈みそうなのもそうなのだが、灰色の雲が空を覆い始めたのだ。アパートの駐車場に着くと、そこにはミユウちゃんが仁王のような恐ろしい顔で待ち構えていた。

「あ、ミユウちゃん、先に来てたんだね」

と、俺はなるべく平常を保ちながら近づいた。するとミユウちゃんは一步足を踏み込み、腰を入れた鋭い正拳突きを俺のあごにヒットさせた。

頭がくらっときた。急所は外してよ……。

足を踏ん張ろうとしたが、すんと地面に落ちてしまった。今までの疲れも素直に出たのだろう。地面に臥した俺に、冷たい雨がぽたぽたと落ち始めた。

「ハヤト！　なんでこんなカヨワイあたしをひとりぼっちにしたの？！　酷いじゃない！」

ミユウちゃんの声がわんわんと頭に響く。もう少し、もう少し倒れる場所がずれば、ミユウちゃんのスカートの中が見えそうだが、残念ながら見えない。ミユウちゃんの事だから、中に何か穿いてるんだろうけど。

「ご、ごべん。雨も降って来たし、中に入ろう」

俺は手でポケットをまさぐり、鍵をミユウちゃんに差し出した。まだ足に力が入らない。思った以上にまともにくらってしまったらしい。

ミユウちゃんは俺の手から乱暴に鍵を奪うと、俺をほっぽりだしてすたすたと部屋にいつてしまった。

さびしい。そこはかたなく、さびしい。けど、ミユウちゃんが俺の部屋に来る。これから二人っきりになってしまう。……そう考えるとなんだか嬉しくなってきた。

雨の冷たさは気持ちよく、俺の体温をほどよく下げてくれた。少しずつ体が楽になってきて、やっと俺は立ち上がることができた。

俺はゆっくりと足を踏みしめ、部屋に向かった。

ふ、二人っきり……か。

こんなへんてこな一日の終わり。そんな日には、いつもなら起きないような間違いが、ついつい起きちゃうかも知れない。俺は下心に鼻の下が伸びきっていたのではないかと思う。一步一步歩くたびに、足に力がみなぎり、胸の鼓動は高まっていった。

部屋に入るとミユウちゃんは鬼のような形相で立ち、俺を迎えた。

「汚い！　どこに座ればいいのかよ！」

男の一人暮らしだ。あまり綺麗好きな性格でもないのに、掃除はひと月に一度程度だ。が、今回はたまたま……ふた月前に掃除をしたところだった。さすがにこれはまずかったな。

「すぐに綺麗に整理するよ。ちょっとまってて」

俺は急いで散らかっているものを部屋の隅にまとめ、掃除機で簡単に部屋を綺麗にすると、座布団をミユウちゃんが座る場所に敷いた。

「汚い！」

といってミユウちゃんはその座布団をどけ、俺がお風呂上がりに使う清潔なタオルを雑巾にしてフローリングを水拭きし、しっかり空拭きしたあとに正座をして座った。

「ミ、ミユウちゃん、さっきはごめん。疲れてて眠そうだったから、そんなに時間もかからなそうだったし、俺一人でパクリに行ってみたんだ。ほら、ちゃんと宝くじは手に入れたよ！」

俺はそう言ってミユウちゃんに宝くじを見せた。すると、ミユウちゃんの目にはみるみる涙が浮かびはじめた。

「なんで、どうして一人でそんな危険なことするの。宝くじの引き替え期限はまだ先だし、疲れてるんなら今日は様子を見るだけでもよかったのに。あたし、あたし、心配で……」

え、俺のことを、心配してくれたの？

「目が覚めたらハヤト、いないし。あたしも事務所に行こうと思ったら、雲運運団の人たちがぞろぞろ戻ってくるころだったから、もう無理だと思ったし。ハヤトは何も連絡くれないし。あたし、だから、諦めて……」

そうか。そうだよな。雲運運団のメンバーが帰って来る時に事務所に向かえないよな。その時には俺は三階に上がってなんとか凌いでいたわけだ。

「一応、電話はかけたよ。けど、電波が届かないか、電源が入っていないってアナウンスが流れて」

ミユウちゃんは咄嗟に携帯電話をポケットから出した。「あっ」と小さな声を出して「ハヤト、充電器借して」と言った。俺はミユウちゃんに充電器を借した。俺の充電器は携帯電話各種対応できるそれぞれのプラグがついた、タコの足のような機械だ。便利と思って買って見たが、いつも同じのしか使わない為、バカだと思っていたが、今日ようやく買った意味ができるかもしれない。

「ええと」と言ってミユウちゃんが使ったプラグは俺がいつも使っているプラグだった。残念、意味が無かった。

「で、ミユウちゃんは先に俺のアパートに急いだわけね」

ううん、とミユウちゃんがかぶりを振った。

「ちやう。あたし、ずっと朝から心配だった、シルヴァブレイズ号を取りに行ってたの。駅も近かったし」

はあ？

「しるばーぶれいず？ 何それ」

ミユウちゃんの眉が、また怒りで吊りあがった。やばい、これ以上刺激しないように気をつけねば。

「あたしの愛車よ！ 駅に行った時、ハヤトは冷たく路駐するような場所に置いておくようになって言ったけど、あたしいつ持ってかれちやうか心配で心配でしようがなかったんだから！」

あら、自転車の話だったのね。って、自転車を愛車と呼び、シルヴァブレイズ号って名前をつけるセンスって、ミユウちゃんは見た目も中身も中学生ですか？！ でも逃亡の最中、そんなに

自転車気にしてたのには気付かなかったな。

「そうだったんだね。ごめんね、気付かなくて。シルバークレイズ号は無事だった？」

俺が愛車を気遣ったからか、ミユウちゃんの目が少し優しくなった。

「うん、大丈夫だった。隣の自転車にぐいぐい詰められてないかとか、倒れてないかとか心配してたけど、きちんと間隔が空いて、取り出しやすく残ってた」

なんか心に引っかかりをおぼえる。さっきミユウちゃんの瞳がうるみ、涙があふれるかと思ったが、充電器のくだりでさっと涙は引いてしまった。

ああそうだ。心配で、って言ってたのは俺の事ではなく、自転車のことだったんだ。俺は危険を冒して宝くじ奪取に命を張っていたのに、ミユウちゃんは俺の事よりも自転車の方が大事だったのか。冷たいなあ。

けど、その冷たさが心地いいんだから、俺、ミユウちゃんが嫌いになれないんだよなあ。

外は雨が強く降り始めていた。

「今日、ミユウちゃんはどうするの？」

「どうするって？」

「その、外の雨が強くなってきたけど、自転車で帰ると濡れちゃうから。俺が車で送ってこようか？」

「いい、その必要はない」

ミユウちゃんは続けた。

「もし車で送ると言って、送り狼にでもなられたら困るもの」

じゃ、すでにひとつ屋根の下にいることがやばいんじゃないの？

しばらく、ミユウちゃんは黙っていた。

俺は、「お茶を用意するよ」と行って狭いキッチンでお湯を沸かす準備をはじめた。温かい紅茶でも淹れよう。俺はこういう時のためにとっておいた紅茶のパックを戸棚の奥から引っ張り出した。

と、そこで背後に気配を感じた。そっと、俺の背に触れる手がか弱い。遠慮がちに体温を伝えるその手に、少しずつ圧力が加わっていく。俺に、もたれかかって来てるのだ。

「泊ってったら、ダメかな」

背中にミユウちゃんの額が触れたのが分かった。ケトルの中で湯がわきはじめていた。俺の胸も、ドキドキと力強く脈打っている。

瞬間、今日の朝から、ミユウちゃんと共に過ごした一日が回想された。随分と、長い一日だった。なんだろう、嬉しいはずなのに、素直に喜べない。戸惑ってしまう。

「いいよ。俺は別に迷惑じゃないから。俺、絶対にミユウちゃんに指一本触れないから、変なことしないから」

俺は本気で誓っていた。スケベ心はあるんだが、ナイトな気分が勝っていた。もしかしたらそんなことになっちゃうかもしれない。……みたいな期待もあるけれど、それ以上にミユウちゃんをちゃんと大切にしたい気持ちの方が勝っていたのだ。

ミユウちゃんは俺の背中で首を振った。

「手をつないでて欲しいの。安心できるように」

うん、と俺は大きく肯いた。

ピーッとケトルが甲高い音を出して湯が沸いたのを知らせた。俺はすぐにガスを止めてマグカップに紅茶を注いだ。

そして俺はミユウちゃんのほうへ振りかえった。ミユウちゃんは静かに泣いていた。涙のわけを聞くのは、野暮だと思った。

俺はミユウちゃんの肩にそっと手を触れた。本当に小さく、細い。こんな体で、壊れてしまわないだろうか、と心配なくらい繊細に感じた。

ミユウちゃんはズツと涙をすすった。そして瞳を上げ、俺に目線を合わせた。明らかに何かを求めている目だった。どんなに俺が鈍感でも、それくらいは分かる。

俺は、震える手で肩を優しく掴み、そっと顔を近づける。

ミユウちゃんも抵抗なくそれに応えた。

呼吸が触れ合いそうなほどの距離で、ミユウちゃんはそっと瞼を下ろした。

鼻先が触れあいそうな瞬間だった。唐突に

ピンポーン！ ピポピポピンポーン！ ピポピポピポピポピーーン！

狂気の16ビートで呼び鈴が鳴った。

俺は残念なような、ほっとしたような気持ちで肩に乗せた手を解き、玄関へ向かおうとした。その時、ミユウちゃんは俺の服の裾をぎゅっと握り、ぼそりと「ほっときなよ」と言った。

「すぐに済むさ。出ないわけにはいかないよ」

そう言って俺は玄関へ行った。

「どちら様ですかー」

と言いながら、俺は魚眼レンズで外を覗いた。そこには割とこじやれた着こなしの、若い男が立っていた。タケオキクチでカジュアルに揃えた長髪の男。手には四角く畳んだシャツを持っていた。

「あ、俺だよ。昼間の」

ずいぶん親しげだが俺はこんなヤツ知らない。

「あの、多分人違いなんで、帰ってもらえませんか？」

と俺がいうと、男は俄かに慌てた。

「いや、俺だよ、雲運運団のカエルマン！ シャツを返しに来たんだよ！」

ああ、なるほど。律儀に今日の今日返しに来たんだ。俺は振りかえり、ミユウちゃんに「雲運団のカエルだったよ」というと、ミユウちゃんは意外な乗り気で「えっ！ 本当！ カエルさん、部屋に入ってもらおうよ！」とさっきの“ほっときなよ”発言が嘘だったかのように言った。

口調もノリもいつもみたい。

どうやらシンデレラの魔法はさっぱり解けてしまったらしい。……ちえ。

鍵を開けてドアを開くと、カエルがすっと入って来た。

カエルの被り物をしないカエル（……なんかややこしいな）はかなりの美形男子だった。艶のあるロングストレートの髪、やさしそうな二重瞼に薄い唇。パツとみたところ、エレキギターを弾いてそうなバンドマンに見える。

「うわ、ちょーカッコいいっすね！」

そう言ったのはミユウちゃんだ。イケメン大好きミユウちゃんは、奥からすたすたとやってきて、「どうぞどうぞ、散らかっていてとても汚いところですが、お入り下さいな」と案内した。

「わりいネ」

カエルは遠慮なく部屋に入ると、座布団を引っ張り自分のおしりに敷いて座った。おい、ちょっと。それ、ミユウちゃんに用意した座布団だぜ。遠慮してくれよ！

部屋の狭い玄関は、あらかじめ出していた俺のスニーカーと合わせ、計四足が占拠。いまだかつてない混雑ぶりとなった。

「いま紅茶できますからネ」

ミユウちゃんはキッチンから淹れたての紅茶を持ってくると、さっさとカエルの前に出し、「いただきまーす」と言って遠慮なく一番に飲んだ。

「ああ、俺ものど渇いてたから、もらうわ」

カエルも遠慮なくカップに口を付けた。……、それ、俺のなんだけど。……とても、言いだせなかった。

「しかし、お前やるじゃないか」

カエルは俺の胸に軽くパンチをして誉めた。

「へ、なんのことですか？」

宝くじを取り返したことか？ もうすでに知っているとなると、少々自分の立場もやばいかも知れないが。

「サカナだよ、サカナ」

すぐにはピンとこなかった。

「ああ、ドリアンね！」

ミユウちゃんが胸に手を合わせて叫んだ。

それを聞いて俺もようやく思い出した。

「ああ、朝真会館のサカナですね。予想通り追跡してきたのを例の香水で撃退しましたよ」

「本当、よく頑張ったよ。お陰で俺たちの方も無事に退会手続きを済ませることができた。チョコレートパレスまで特に追われることなくついて、事情を話し、いかに俺たちが足手まといで役に立たないか、力説したよ」

そういう力説って、かなり格好悪いと思いますけど。

「下手したらサカナに追跡されて、変に話がこじれた可能性があったからなあ。タコ頭も感謝してたよ。で、コレ」

俺はカエルからシャツを受け取った。きちんと綺麗に畳まれているが、明らかにクリーニングされた様子はなかった。まあ、そんな時間無かっただろうけど。

「じゃ、俺も返すっす」

俺が服を脱ごうとすると、「待て待て、やるよ」と言って制した。

「また洗濯して使ってくれ。幸いサイズも同じだしな」

「カエルさん、やっさしー」

ミユウちゃんが感激している。たぶん、カエルは意外と潔癖症で、他人が着たシャツを二度と着たくないだけだと思うんだけど。

「お？ お嬢さん、俺に惚れた？」

「惚れた惚れたー」

ミユウちゃんはカエルにぎゅっと抱きついた。俺は平然とその場に座っていたが、内心かなりショックだった。

いつも振られ続けていて気が無いのはわかってたけど、ついちょっと前はなんかいい感じだったじゃないか。ミユウちゃん、さすがにそれはきついぜ。たとえ冗談でも、きついぜ。

「ところで宝くじの方は首尾よくいったかい？」

カエルは割と女性には潔癖なようで、ミユウちゃんを引き離し、きちんと遠ざけてから俺にたずねた。

「お陰さまで。鍵の情報まできちんと用意されてたので助かりました」

「その謎、あたしが解いたんだよ！」

「ああ、植木鉢の下ね。それを伝え忘れてたもんね」

「ミユウちゃんは寝ていたので、俺が一人で潜入して、無事に盗ってくることができました。しかし焦りましたよ。帰りに連中が休憩から戻ってくるのとかぶっちゃいましたから。どきどきの逃走でしたよ。廃ビルに戻るとミユウちゃんはいなかったし」

「あたしはその時、駅までシルヴァブレイズ号を取りに行ってたの。自転車なんだけど」

カエルは少し目を伏せ考え事をした。そして、指をパチンと鳴らすとミユウちゃんに人差し指を向けた。

「シャーロックホームズの回想」

「正解！」

俺はワケが分からなかった。

「へえ、お嬢ちゃん、ミユウちゃんだっけ。センスいいね」

「だしょ！ そのナンセンス男はちっとも気付いてくれないのよねえ」



ミユウちゃんとカエルはずいぶん親しげに共感していた。なんか、俺だけが取り残されてるようで、疎外感を感じた。さみしい。

ミユウちゃんの自転車の名前を聞いて、俺はまるで中学生かよ！ って思ったけど、カエルは名前の由来を理解して、センスいいね！ と誉める。これが、モテる男とモテない男の差なのだろうか。

「シルヴァブレイズ号の話は名作と言われるまだらの紐より、ミステリーとしてしっかりしているように思えて、俺は好きなんだけどな。競走馬の名前なんだよね」

「そうそう、もともとお馬さんの名前。ホームズの探偵捜査もとっても面白いのよね。なんでこんな変なことしてるんだらうって思うんだけど、解答編でその奇行の理由をしっかりと説明していて、なるほど！ って思うし」

はあ、完全に話についていけない。ヒッチコックとか詳しくあったけど、きっとカエルもミユウちゃんもミステリーが大好きなんだな。

「ところで雲運運団って、なんであんな変な格好をみんなしてるの？ コアラの格好してる人とかいたけど」

俺がいうと、ミユウちゃんもやはり気になっていたのだろう。カエルの二の腕をつかみ、「教えて教えて」とせがんだ。

「ああ、確かに傍目には変だよな。説明しよう」

カエルはミユウちゃんの手を払いのけ、俺の方をまっすぐ向いて話し始めた。

……意外にこの男、硬派かもしれない。

「雲運運団の目的は幸福を追求すること。しかし、たいてい俺なんかもそうだけど、自分に自信のない、コンプレックスの塊のような人間がそこに集まっているんだ。そこで雲運運団で活動するときは仮の姿になり、コンプレックスのない、完璧な自分を演じるんだ」

「なんか心理学で聞いたことがあります。変身願望というか、違う自分になり、いつもの自分を捨てることで心が軽くなる。まあ、現実逃避みたいなもんでしょ」

「それはよくわからないが、そうかもしれない。現実逃避と言っても、別にリアルな考えを捨てるわけじゃない。そういう意味では間違いだ。違う自分になるだけだからな。どちらかというインターネットの方が正確かも知れないな。インターネット上の匿名性の高い状態で、いつもと違う自分を演じるみたいな。雲運運団ではあくまでプラス発想で目の前の問題を考えるために、被り物や変装をして、違う自分になり変わるんだ。そして、それを“仮の姿”と呼ぶ」

「はあ、マインドコントロールする新興宗教では、そっちを本当の姿ですよ、みたいなこといいそうですけどね」

「雲運運団は宗教じゃないけどね。仮の姿は仮の姿。だって仮の姿でいくら気持ちが偉くなくても、被り物を外してコンプレックスの塊に戻るんだったら、結局そんなの幸せじゃないじゃない」

なんか、急に現実的でまともな話になった気がする。

「だから究極的には仮の姿を脱いで、コンプレックスを克服するのが目的でもあるんだ。仮の姿で成功を収め、その成功は実は被り物をしている自分だからできたことではなく、本来の自分の

力で出来たことなんだ、と。といってもまだその域に達しているのは団長のウドの大木と、数人の優秀な団員くらいだけだね」

そういえば被り物をしていない雲運運団がいた。うさんくさい初老の男。俺がビルを去って通りに入る前にすれ違った、あいつ。もしやあいつが団長だったのか?! ……ずいぶん団員に野次られてたけど。

「なるほど、ちゃんと被り物には意味があったんですね。けど、被り物をして街に出るのって恥ずかしくないですか？」

「恥ずかしいよ！ だからたいてい事務所から出る時は外すし、休憩時間くらいかな。いきつけの近所の喫茶店だけは被ったまんまでいく。メンバーの店だからね」

「じゃ、今日これだけ町で見かけたのって、やっぱり珍しいことだったんですね」

「そうだよ。普段見たことないだろ」

「見たことなかったっす。けど、どうして今日はその被り物の格好で追いかけてきたんですか？」

「それは任務だからだよ。任務を遂行する時は、絶対に“仮の姿”を外してはいけないことになってるんだ」

ルールに律儀な雲運運団の性格がうかがえる。

「もし犯罪に関わることになった時、誰が犯人かごまかせるだろ」

ぶっ、とミユウちゃんが鼻から紅茶を出した。俺もその言葉に少々ビックリした。

「は、は、犯罪冒すんですか?!」

「時に超法規的な行動をとることはやむをえないからな。大抵映画見ててもそうだろ？」

「た、確かに刑事ものの映画とか。犯人と対峙するのに法やルールを破って行動して、結局事件を解決させて結果オーライってあるけど。現実と映画は別っしょ?!」

「そんなこと言ったら、宝くじの当選番号、ずる出来ないじゃん」

「だ〜か〜ら〜、根本的にそれがよくないのよ！」

けど、確かに。すでに雲運運団は超法規的な行動をとってきていたのだ。悪いやつらだったのだ。

「まあ、人それぞれいろんな考え方があるから、これを口論しても仕方がないわな。……じゃ、そろそろ腹も減ったし俺は帰るわ。兄ちゃん、二人きりのところ悪かったな」

どきりとした。

「え、いや、そんなんじゃないっすから」

俺がもじもじしながらいうと、カエルは俺の肩をポンと叩き、「彼女を大切にしてくれ」と言って立ちあがった。

カエル、いいヤツじゃないか！

「ええ！ もうカエルさん帰っちゃうの！」

「ああ、世の中は狭い、きっとまた会うこともあるだろうさ」

そう言ってウィンクした。

靴を履き、カエルが外に出ようとした時、ゴッドファーザーのテーマが流れた。俺とミユウちゃんの携帯の着信音とは違う。恐らく、カエルの着信音だ。

カエルは携帯をポケットから出し、画面を確認した。メールだったらしい。その文面を確認し終わると、カエルは青い顔をして俺を見た。

「パンダマン、どうやら宝くじが無いことに気付いたらしい」

心臓がぎゅっとわし掴みにされた気がした。

「大変なことになった。パンダマンは宝くじを奪ったのが、朝真会館の連中だと勘違いして、今から朝真会館に乗り込むことになったって」

つづく！

あとがき？ 次回予告？ ひとりごと？

---

しろあです。

いかがでしたでしょうか、先行公開版プレミアムミニッツ。

私の怠慢もあり、ラストまで書きあげてあるものの、公開までにはいたらずに打ち切りになります。

なぜ打ち切りか？！

その理由はこの作品を投稿するためです。

どの文学賞も投稿作品の二重投稿や、すでに発表した作品は選考対象から外されます。

また文学賞に落ちたら（笑）、堂々と全編公開しますからその時まで待つ人は……待っててね。

続き読ませろ！ 最後どうなるんだ！ と思っていただける方がいればコメント下さい。

個別に対応いたします。ホームページに期間限定でアップするとか。

今回のお話も校正しながら自分でもすごく楽しめました。

私としては珍しく恋愛要素があったりして。ミユウちゃんの可愛いところがぎゅっと詰まった章だと思います。

さてさて。

とりあえず「ぷれみあむみにっつ」は打ち切りますが、すでに落選した長編小説を続いて公開します。

「文福堂へ行こう」。というコテコテの純文学作品。骨のある小説を！ どこから読んでも面白い小説を！

と意気込んで書き、みごとに作り上げることができた……と自信を持っている作品なんですけど。

下読みサンは見る目がないね。ムーブメントが作れるネタがぎっしり詰まってるのに。

ぜひぜひ読んでみて下さい。ちょー、面白いですよ。

エチュード的な短編も少しずつアップします。こちらもお楽しみに。

では！